巻頭言

生きる力の根が養われる〝最初の三年間〟

今井和子

私は、授業の初回で学生たちに「これから一年間、新聞から子どもの話題を切り抜き、ノートに貼っていくように」と話し、私も実行しています。二〇〇九年で最も多かった記事は、「待機児童が増え続けている」ことに関するものでした（九月の時点で2万5千人）。中でも特に一、二歳児に集中し、保育所では一、二歳児のクラスの規模が膨れ上がっていることを見てきました。自我が芽生え、自己主張が始まり、大人の手を焼く年代です。一人ひとりがどれだけしっかり自己主張するようになるか……。目を輝かせながら思いもかけないいたずら（探索活動）を楽しむ姿を願う時期でもあります。ですが、集団の規模が大きくなると、どうしても一人ひとりに目が行き届かず、「かみつきや怪我だけはさせないようにという安全保育」だけが優先されてしまうのではないかと危惧し、「一、二歳児保育の現状」に関する調査を始めました（於全国私立保育園連盟　保育・子育て総合研究機構）。

三年間の継続研究の結果、現場の保育者の悩みは、「現実の保育の場では自我の育ちを援助していくことや、自発活動を楽しませる環境構成までは到底及ばない」というもので

あることがわかりました。一、二歳児は、親密な大人との信頼関係を基にさまざまな経験を広げながら自己意識が芽生え、他児への関心も生じてきます。自分のつもりをまだ言葉で伝えられないだけに、わかってもらえない葛藤やいら立ちが大きくなります。私は、その時期の環境のあり方と大人のかかわりこそがその子の人間形成に大きな影響をもってくると考えているだけに、心配でなりません。

二〇〇九年十二月一日の朝日新聞のトップに「小中高生の暴力6万件　三年間で7割増」という極めてショッキングな記事も報道されました。その要因については、「感情がうまく制御できない」「コミュニケーションの能力が足りない」といった子どもの変化が背景にあることを指摘していました。なぜでしょうか？　その原因の一つに私は、三歳未満、特に前述の一、二歳の時の大人のかかわりが影響していると思えてなりません。自分の思いどおりにならない事態にぶつかり混乱状態になると、当然子どもは泣きわめきます。その時こそ、「泣くんじゃない、怒るんじゃない！」と感情にふたをしてしまうのでなく、「つらいね、思いが通らなくて……。泣きたい時は泣いていいんだよ。泣くと気持ちがすっきりするからね」と感情を吐き出させていくことで、激しい感情を治められるようになる体験をし、言語化できない感情を大人が代弁してあげることで、子どもは自分の感情に直面し、やがて気持ちを静め、どうすればいいか判断できる力がついていきます。

幼い子どもは、自分の心の願いを大人に理解してもらうことによって意識化していくのです。誰かと心を通わせないでは生きていけない一、二歳児にとって大切なのは、言葉で

表現し切れない自分の感情を受け止めてくれる大人の存在です。「二歳のような五歳さん」「二歳のような小学生」といわれる子どもたちは、一、二歳の時期に自分の感情を受け止めてもらえず、一方的に抑え込まれてしまった孤独な子どもたちの姿といえないでしょうか。

子どもの話題で次に多かったのが、虐待です。虐待で命を奪われている子どもが、年間50人もいます。特に、ネグレクトが増えているそうです。子どもたちは、テレビやビデオなどではなく、人と向き合い、気持ちのこもったやりとりをしていく中で、確実に、コミュニケーションを図る力、他者と共鳴し分かち合う力をつかみ取っていきます。大きくなって感情がうまく制御できずアレたりキレたりするのは、一つには大人に自分の苦しみや悲しみの感情を理解してもらえず、ストレスがたまりにたまってしまった状態といえます。どんなに激しい感情も、流れる水路があれば治まっていきます。人は人間関係を通してしか、自分というものの存在の意味を実感できません。子どもの虐待を防ぐ方策を、国で進めていくことはできないでしょうか。

無頓着になされている日常の育児の中にも、虐待に近いことが行われています。それは授乳です。「授乳中にメール」を打っている母親が多いことです。〝これは虐待に等しい〟と作家の柳田邦男氏も訴えていますが、授乳の時こそ、しっかり抱かれて飲む充足感を味わわせてほしいものです。抱っこによるアイコンタクトの成立、すなわち見つめ合いによって、社会的微笑や目を見て人の気持ちを感じ取っていく思いやり行為の礎が育まれます。自分の世話をしてくれる特定の大人から手厚い養護を受けてこそ、人への基本的信頼感や

自己肯定感が育まれていくことはいうまでもありません。

実際、子育てほど先の見通しがつかないことはありません。子ども一人を大学に入れ、一人前にするには約１５００万円もかかるといわれています。それだけお金をかけても、独立してしまえば子どもは親の面倒など見てくれない。だから子どもにかけるお金は、自分たちの老後に使ったほうがましじゃないか……。すべての物事をお金で計算する物差しも普及してきました。「結婚しても必ずしも子どもをもつ必要がない42％、20代女性は68％」という見出し（十二月六日、東京新聞）には胸を突かれました。

先日私は、お茶の水女子大学の初代女性学長でいらした本田和子氏のお話を聞かせていただきました。１・５７ショック以降、矢継ぎ早に提案される少子化対策が成果を上げていないことは「女性が子どもを産むことをめぐる心の問題、子どもの価値の変化の問題が大きいのではないか」――拡大する格差への対策と子どもの存在の意味を改めて社会に問うていくことの大切さを話されました。いま、子どもたちはこの社会をどう生きることを要請されているのでしょうか？　いまの日本の社会にあって唯一、乳幼児の砦（とりで）である保育所・幼稚園（そうとも言い切れないところがあり複雑な気持ちですが）では、保護者と一緒にぜひ、「子どもという価値」の真実を追究し、「子どもの存在の意義は何なのか？」を考え、「子育ては煩わしく大変だけれども、子どもと一緒の生活には、ほかには代えられない何かがある」ことを、改めて社会に訴えていかなければならないのではないかと痛感した次第です。

（立教女学院短期大学）